

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年 (八十五)

第三章 アラーの恵み―石油ブームの到来 (二十二)

八十五 第一次オイルショック ― 石油を武器に! (二―三)



そのことを知悉している。

1973年十月六日、第四次中東戦争はエジプトとシリアの奇襲攻撃で始まり、第三次中東戦争の結果スエズ運河を挟んで対峙する形になっていたエジプト軍は運河を渡河、シナイ半島に駐留するイスラエル軍を猛攻した。一方、ゴラン高原ではシリア軍がイスラエル軍の防衛線を突破、イスラエル軍はシナイ半島とゴラン高原の両面作戦で苦戦を強いられ、この時点では戦況はサダトの思惑通りであった。イスラエルは究極の作戦として核兵器の使用も検討したといわれる。

イスラエルは今も核兵器の有無について肯定も否定もしないが、同国が核兵器を隠し持っていることは世界周知の事実である。そしてイスラエルは自国の生存が危機に瀕した場合、核兵器の使用を躊躇しないであろうことを世界中の誰も疑問視していない。イスラエルは勝つためであれば手段を選ばない。米国の強い支援を受けているイスラエルの場合にはそうであろう。「米国も使ったではないか」或いは「核兵器の使用で戦争を早期に集結させることができた」と言う言い逃れが使えるのである。一般論として言えば敗戦国と異なり、戦勝国が戦争中に行った非人道的な作戦は後々問題にされることが少ない。イスラエルは

しかし幸いにも究極兵器の出番はなかった。イスラエル軍がすぐに体勢を立て直し反撃に出た結果、三日目の十月八日には戦闘は膠着状態に陥った。サダトの危惧した事態が思ったよりも早く到来したのである。サダトは開戦前から短期決戦で自陣営が有利なうちに第三国の仲介により停戦に持ち込むことを狙っていたが、彼の思惑が狂い始めた。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: Arehakazuyai@gmail.com